

B 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒芯のシャープペンシルで記入することになっています。黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

一 左の文章は一九五三年に発表された小説の一部である。「僕」は、普段行く釣り場で十二、三歳と十歳ぐらいの兄弟に餌を盗まれたらしいと気づいた。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

僕が近づくと、二人は急に緊張したようだった。かたくなに僕の方を見ないようにして、ことに弟の方は背をかくして、あきらかにおそれに満ちた表情でそっぽを向いている。子供の餌箱の中には、僕のと大体同じ型の同じ大きさのゴカイ(注1)が、ぐにやぐにやともつれ合っていた。そして子供の浮子(注2)がビクッと大きく動いた。

「そら、引いてるじゃないか」

そう僕は言いかけて、途中で止めた。兄は釣竿(つりざお)を上げようとはしない。じっとしている。浮子が動かなくなつて、それからそろそろと竿を上げた。糸の先は針ばかりになっている。餌をとられたのだ。

「バカだな。しつかりしろ」

そう言おうとして、僕はやはり言わなかった。向うも内心ジタバタしているが、別の意味でこちらもジタバタしている。その意識が急に僕の口辺(くちべ)を硬(かた)ばらせた。僕はそのまま背を向け、振り返らず、まっすぐに防波堤を岸の方に歩いた。防波堤は岸に近づくにつれて低くなり、満潮時だから海水に没している。(1)膝頭までひたす海水を、はねのけるような気持(きもち)で進みながら、何だかやり切れない感じがしだいに強くなって来た。子供たちからなめられたような気がしたのか、子供の所業がしやくにさわったのか、またその所業を見逃した自分がやり切れなかったのか。そしてあいつ等は、餌を盗むのに、沢山の中(あま)からよりによってこの俺をえらんだ。どういう目安で俺に白羽の矢を立てたのか。そういうことを考えることは、あまり愉快なことではなかった。連れでもいたら、その連れに話すことで、幾分気持は軽くなるだろうが、僕はその時ひとりだった。口下手な僕は、ことにその頃は性質(けい)もシメ(し)めていて、防波堤でもどの常連とも会話すら交わしたことはなかったのだ。

まあその日から一週間ばかり経った。やはり曇ったような天気の日ばかりだった。前の日とちがって、魚(あ)の当りが悪かった。潮加減がよくなかったのだろう。僕は朝から釣れないでいい加減(あ)くさっていた。その上岩

にひっかけて、糸を何本も切らしていた。昼の弁当を食い終つても、僕の魚籠(注3)はほとんど空だった。そこでもう今日は止めて帰ろうと思つたのだ。

そしてふと振り返つた時、そこにこの間の子供がいたのだ。この前と同じように、兄弟並んで、ぼんやりと海を眺めている。その時僕は、ほとんど無意識に、そして彼等に気付かれないように、自分の餌箱を脇に引き寄せていたのだ。次の瞬間、その自分のやり方が急にあららしく僕に反撥ぼつしてきた。れいのジタバタが始まつた。

「ふん」

と僕は思った。そんならあの子供たちに、今日はこちらから餌をわけてやる。そんな思いつきがとたんに頭をかすめた。もうどうせ帰るのだから、残りのゴカイは不用なわけだ。ゴカイというやつは、とても条件を良くしないと、翌日まではもたないのだ。

僕は立ち上あがつた。⁽²⁾餌箱をぶら下げて、ためらわずに兄弟に近づいて行つた。

聲音を聞いて、兄弟は振り向いた。警戒するように二人の表情は突然するどくなつた。兄の方は、よりそつてきた弟をかばうように、身体を動かして構えた。その兄の眼付きは、僕をたじろがせるほど烈はげしかった。

「餌をやるうか。え？」

さり気なく言つたつもりだが、あるいは兄弟はその語調のうらに、なにか底意(い)を感じたのかも知れない。

「餌がないのだから。いらぬのか」

子供の傍そばの餌箱は空で、底には少量の泥がかさかさ乾いている。兄は警戒の色をますます深め、じつと僕をにらんでいる。弟の方の顔はしだいにくずれて、今にも泣き出しそうな顔になつた。しかし泣き出しはしなかつた。眼をキラキラさせて、唇くちびるを噛みしめている。僕はしだいに自分のこんなバカな思いつきを後悔し始めていた。しかしこのままではひっこみがつかない。僕は少しいらだつて来た。

「餌、欲しくないのか」

笑つて見せようとしたが、笑い顔にならなかつたかも知れない。僕は餌箱を眼の前につき出そうとした。その

時突然、兄の方がいやにはつきりと答えた。

「いらん！」

そうか、と僕は言い、しかし俺はもう帰るし、どうせ餌は捨てるんだから、要るのなら置いてゆくよ、とまだ言い終らないうちに、

「いらん」

ともう一度兄が言った。ほとんど同時に弟が唇を曲げるようにして、

「いらないぞ」

とつけ加えた。兄の声は、前ほどつつけんどんではなく、やや弱々しくひびいた。そうか、としかし僕もすこしむっとした。しばらく視線を合わせていたが、僕は突き出した餌箱の恰好がつかず、そのままゴカイを放り出すようにして海面に捨てた。⁽³⁾三人の視線は一度にその方に動いた。

赤くもつれ合ったゴカイは、ひとかたまりのまま緑色を帯びた海水に落ち、そこでやわらかくほぐれ、数条の赤い模様をつくり、美しく伸び縮みしながら、しずかに沈んで行った。沈んで見えなくなるのを見届けて、僕は子供に背を向けた。

海沿道を歩いて帰りながら、僕はしだいに心が重かった。そして僕はあのヒンソウな兄弟のことをやはりあれこれと考えていた。たとえばあの子供たちは、父が居ない、母親だけのうちじゃないのか。そして彼等が釣つて来る魚が、重要な家計の足しになると言ったような。いつも餌を使い果たしているのも、充分に餌を買うだけの余裕のないやりくりではないのか。

しかしそれはことごとく、僕の感傷のジタバタだったんだろう。つまり現実の摩擦を避けるために、僕の打った手が、逆に僕を惨めにしたに過ぎなかったのだろう。そしてその日以来、僕はその防波堤に行くのを止めた。釣り場を他に移してしまったのだ。だからその子供たちとも、もう顔を合わせたことはない。

それから十年経つ。あの兄弟も生きていれば、もう二十歳を越しているわけだ。僕が時々あの子供たちを思い

出すように、あの兄弟も僕を思い出すだろうか。思い出すと仮定して、その思い出される僕自身のこと、彼等の眼に映った僕の挙動や表情や声音こゝろを思うと、僕は今でもちよつとやり切れなくなってくる。それはあの時代の憂鬱ううつと、二重に僕にかぶさつて来るのだ。でも、あの緑の海に紅あかく伸縮するいくたのゴカイの姿は、ほんとに言いようもなく美しかったなあ。あんな美しいものは、僕はあまり見たことがない。⁽⁵⁾この美しい終止符があるために、僕の記憶のやり切れなさも僅か救われているようなものだ。

(梅崎春生「魚の餌」による)

(注) 1 ゴカイ——釣り餌として利用されることの多い、ムカデに似た外観の生物。

2 浮子——釣りの際に水面に浮かせ、魚が餌をくわえたことを知るために用いるもの。

3 魚籠——とった魚を入れておくかご。

問

(A) 線部(イ)・(ロ)と同じ漢字を含むものを、左記語群の中から一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。

(イ) シメつて 1 親子のカクシツ 2 カシツによる事故

3 オンシツ育ち 4 シツジュンな風土

(ロ) ヒンソウ 1 ヒンイを損なう 2 セイヒンな生活

3 カイヒンの別荘 4 ヒンパンに会う

(B) 線部(あ)・(う)について。本文中の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。

(あ) くさつて

1	めいって
2	腹が立つて
3	吹っ切れて
4	不安になって
5	気がゆるんで

(い) 底意

1	危険な気配
2	秘めた真実
3	反対の目的
4	冷酷な態度
5	不純な思惑

(う) つっけんどん

1	さわがしいさま
2	せわしないさま
3	とげとげしいさま
4	あらあらしいさま
5	おさえきれないさま

(C) ——— 線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 海水の心地よさを感じて、子供への疑いから生じる不快感を忘れない。
- 2 子供の生意気な態度が気に食わず、何かに当たり散らしたい。
- 3 他人と上手に関係を築けない自らを、力任せに罰したい。
- 4 思い切って帰る決断をすることで、自分の行動を前向きに捉えたい。
- 5 子供と関わりようとして失敗したことを、取るに足りないと思いたい。

(D) ——— 線部(2)について。「僕」がそのように行動した理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 子供と再会したことを運命と見て、彼らとの関係を変えたかったから。
- 2 思うようにいかない一日だったので、勢いで憂さを晴らしたかったから。
- 3 再び見かけた子供を警戒した自らを、なかったことにしたかったから。

- 4 気前よく餌をあげる姿を見せることで、子供の心を開きたかったから。
5 せっかく餌が残っているのに、みすみす処分するのが惜しかったから。

(E) 線部(3)について。この表現の特色を説明した次の各項について、適当なものを1、適当でないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 主語の省略によって作中人物の驚きが示されている。

ロ 副詞によって作中人物が同調するさまが表現されている。

ハ 擬人法によって人物描写に躍動感が生じている。

ニ 三人称文体によって客観的な情景描写が可能になっている。

(F) 線部(4)について。これは具体的にはどのようなことか。句読点とも三十五字以内で記せ。

(G) 線部(5)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 今でも十年前の自分の後ろ向きな気持ちに立ち返り、辛くなることがあるが、既に成人しているであろう子供も自分を思い出してくれていると思うと、三人で見た海に沈むゴカイがひときわ美しく思い出される。
- 2 子供が犯してしまったあやまちを、自分は大人として追及できなかつたが、海面に放り出したゴカイの美しさに三人とも目を奪われたことよって、それぞれの好ましくない行いが浄化されるような気がしている。
- 3 釣り場での十年前の出来事は、子供が素直でなかつたために不快なことの連続だったが、思いがけずゴカイの美しさに触れることができたので、今となつてはかえつてすべてを良い記憶として胸に収めている。
- 4 釣り場での子供との思い出は、憂鬱な時代の中にひとりでいた自分の姿を必然的に想起させるが、ほぐれながら海に沈んだゴカイの美しさは、いまだに自分が感じてしまうやり場のない気持ちを和らげるようである。
- 5 自らの弱さゆえに子供に背を向けてしまったことを、十年経つても悔いているが、彼らとの交わりの最後を目にした海に沈むゴカイの美しさは、時間が経てば心のこわばりもほぐれると慰めてくれるようである。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

キャンプにやってきて、山々の風景を眺めているでしょう。そのとき、「私の意識の境界線」は見えるだろうか？なるほど、私の視野は限られているはずである。だが、私の視野の境界を見ようとしたら、その部分はまた見えてしまうから、やはり私の視野の内側になってしまう。どこまでいっても同じことの繰り返しである。これと類比的に考えるなら、私の意識の境界線があるとしても、それを意識しようとしたら、やはり意識の内側になってしまうから、どこまでいっても境界線は意識できないということになる。

このように、「意識する」ということに立脚するなら、そこに「境界線を見る」ということは原理的に不可能であることがわかる。まず第一に、意識している本人にとって、意識の境界線は見えない。第二に、意識している本人以外の他人が、その限界を見ようとしても、そもそも他人の意識そのものが意識できない。だから、他人の意識の境界線を見ることもできない。

「意識する」ということに立脚するかぎり、私が見ている一切は、私にとって見られた主観的な現実の姿である。それは、どこまでいっても主観的な世界である。

しかし他方、私は、それが一切であるとは思っていない。「私の意識」が、あるものの一切ではない。主観的な世界には「外」があると思っている。自分自身の「主観的世界」と呼びうるようなものを、三人称的に、客観的に考えることもできそうに思える。その場合、われわれの視点は、もはや当の主観的世界の「内側」にあるのではなく、それを「外から」眺める(観察する)ような視点となっている。

「意識のハードプロブレム」が浮上してくるのは、このような視点¹⁾にとってである。一方に脳の物理的なシステムがあり、他方に「意識」とか「主体性」と呼ばれるものがある。われわれは、この二つの異なったものを、双方共に外から眺めているかのような視点に立っている。そして、それらはどのような関係にあるか、と問う。しかし、それらはあまりにも異なっているので、双方の間に、共通する「境目」を見てとることができない。双

方を「つなぐ」境界線が見えないのである。だから、この二つを「つなげて」考えることができない。われわれ自身が自分の意識として経験しているものと、客観的に観察されるもの（たとえば脳活動）とが、経験されるものの種類としてあまりにも違うので、それらが「どこでどうつながっているのか」がわからないのである。こうして、「意識のハードプロブレム」と呼ばれるものがわれわれの前に立ちはだかってくる。

このように、意識のハードプロブレムとは、意識と脳間の「境界のなさ」を表現しているともとれる。双方をつなげ、見渡せる境界がないから、意識と脳の関係をどう考えて良いのかわからないのだ。どのようにしたらこの袋小路ふくろこうじから抜け出せるのだろうか？

ここで、考察を進めるための障害となっていた「境界のなさ」を再考してみる。意識や主体性と物理的なシステムとの間に境界が見えないのは、そもそも、意識や主体性そのものが、「境界をもたない」からではないのか。別の言い方をすれば、「境界をもつ」ようなタイプのあり方をしていないからではないのか。

すでに考察したように、われわれが一人称的観点から自分の意識や主体性を見るとき、どこにも自分の意識の境界を見ることはできない。内から見れば、一切が自分の主観的世界なのである。しかし他方で、われわれはそれが「すべて」であるとも思っていない。自分の主観的世界は限定されており、それには「外」があると思っ

ている。
要するに、ここでは「見えない外」³⁾との関係が問題となっている。この「見えない外」と関わっている実感をわれわれはもつが、この「外」との境界を見ることは原理上できない。それはいわば、「境界のない外」である。このような「境界のない外」との関係が、主体の内的な生を特徴づけている。

このような「境界のない外」との関係をどのように考えられるだろうか。ここでは、われわれが何かを客観的に考えるときに一番得意とするような、「境界線を引く」という操作が使えない。境界線を引いて、「こちらは内、こちらは外」とし、それらの間の関係を考える、という手順が使えない。これは「観察」(observation)というやり方だ。つまりわれわれはここで、「観察」という馴染みのやり方を使えないのである。

これは、われわれが「境界のない外」との間にもつ関係が、「観察」という関係ではないということを意味している。「境界のない外」との関係は、「観察」ではなく、むしろ「行為」(action) 4) 的關係ではないのか。われわれはいわば、「行為」によつて「見えない境界」を乗り越えているのではないか。

私は、私の主観的世界の外を「観察」することはできない。(できたらそれは主観的世界の「内」である。)しかし、そのような「外」へと行為的に関わることはできる。行為することによつて、われわれは自分の既知の世界から出て、新しいものに出会うことができる。このような仕方では、「見えない外」との関わりが実現される。

ここで「観察できない」ということは厳密に受けとる必要がある。われわれは、とりわけ学問的・客観的に考えようとするときには、境界線を引いて関係を理解することに慣れ親しんでいる。しかし、いま問題にしているのは、そのような仕方では捉えられない関係だ。といつても、何か特殊な、特別の考え方を導入しているわけでもない。ここで問題にしている考え方は、科学的・客観的に考えるときには、われわれがそこから離れようとしている考え方だが、実はそちらのほうがわれわれの日常の生にとつてはより身近なものだといえる。

自転車の乗り方をいくら言葉で説明されても、自転車に乗れるようにはなれそうもない。じつさに自転車に乗つて練習を繰り返した結果、いつかある時点で、「自転車に乗れる」という状態がやつてくる。このときわれわれは、ある境界を、「見る」ことなく乗り越えている。それは、「やつてみる」ことによつてしか乗り越えられない境界である。「行為的」という言葉で言おうとしているのは、こういうたような事態である。

別の例を挙げよう。モールス信号で通信するとき、われわれは聞こえてくる音声に耳を(1)スまし、その規則的な連続を書き取り、そこから情報を再構成していこうとする。他人と話すときにも、われわれは自分のコマク(2)に届く音声をじつと観察し、そこから情報を再現しようとしているだろうか。明らかにそうではない。(注2)フツサル(3)が言うように、「私が聴くのは音感覚ではなく歌手の歌である」。会話においては、私は耳に聞こえる音声ではなく、相手の話に注意を向けている。そこでは、「他人の意識は経験できない」ということが障害として際立って

くることはあまりない。相手の話が理解できるかぎり、そして自分の話を相手が理解しているように見えるかぎり、お互いがお互いの主観的経験を越えた「外」にいることは易々と乗り越えられ、ある種のサイクルが回り続ける。このサイクルは時に崩壊するが（お互いの話が全然わからなくなる場合などがそれにあたる）、それによって会話一般が不可能になることはない。会話の崩壊を越えて、意味のある会話を再確立する可能性は随所に成り立っている。このような会話において、われわれは「見えない」境界を絶えず行為的に乗り越えている。乗り越えた先で、会話が崩壊する可能性も織り込み済みで、われわれは「話しかける」という行為に乗り出していく。互いに明らかに「外」にいるのに、その境界は見られることなく乗り越えられる。話が理解されるかされないかも、話してみなければわからない。つまり、齟齬や分断も、自分の外へ、互いに相手の側へと乗り越えることなしには露呈しえない。⁽⁵⁾そこで鍵となっているのは「行為」である。

（吉田正俊・田口茂『行為する意識 エナクティヴィズム入門』による）

（注） 1 意識のハードプロブレム——意識がどのようにして生まれるのかという科学的に明らかにされていない難問。

2 フッサール——オーストリア出身の哲学者（一八五九—一九三八）。

問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書で記すこと）

(B) 線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 意識は境界をもたないという仮定に立つ視点。
- 2 主観的に眺められた世界が現実の一切とする視点。
- 3 意識をその内側から主観的に眺める視点。
- 4 意識や主体性を客観的に観察する視点。

5 意識のあり方を行為的關係から捉える視点。

(C) —— 線部(2)について。なぜ「袋小路」に追い込まれているのか。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 意識と脳の境目がわからず双方を並べて見ることができないから。

2 意識どころか脳の物理的システムさえ説明できないから。

3 意識と脳の特徴が似ていて双方の違いを理解できないから。

4 自分の意識経験と客観的に観察されるものの矛盾を解消できないから。

5 自分の意識と他人の意識のつながりを説明できないから。

(D) —— 線部(3)について。その説明として適当ではないものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 「見えない外」を客観的に観察することはできない。

2 自分の主観的世界と「見えない外」との間に境界はない。

3 自分の内面は「見えない外」との関係によって特徴づけられる。

4 行為によって「見えない外」と関わることができる。

5 一人称的観点からは「見えない外」の存在に気付けない。

(E) —— 線部(4)について。次の各項のうち、本文の内容から観察的關係の例と考えられるものを1、行為的關係の例と考えられるものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 自転車の乗り方を言葉で理解する。

ロ モールス信号から情報を再現する。

ハ 友人の歌声に聴き入る。

ニ 会話において相手の話に注意を向ける。

(F) —— 線部(5)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 相手の話を聞くという行為よりも話しかけるという行為によって会話は成立するものだから。
 - 2 話しかけるといふ行為を何度も行うことで自分の話が相手に理解されるようになるから。
 - 3 相手の主観的世界とつながりをもつには話しかけるといふ行為によるしかないから。
 - 4 話しかけるといふ行為を絶えず行うことで相手との齟齬や分断を避けられるから。
 - 5 話しかけるといふ行為によって自分と相手の意識の境界が見えるようになるから。
- (G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 視野も意識も自分でその境界を見ることができないという点で共通している。
 - ロ 何かを客観的に考えようとすると、境界線を引いてその内と外の関係を観察しようとする。
 - ハ 観察によって捉えられる関係は行為的關係よりも日常の生にとつて身近である。
 - ニ 自転車に乗れない状態と乗れる状態の境界は自転車に乗る練習を繰り返すことで理解できる。
 - ホ 他人の意識は経験できないということが会話を成立させるための顕著な制約となる。

三 左の文章は『更級日記』の一節で、作者(当時三十二歳)が祐子内親王家に女房として出仕し始めた頃のことを記している。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

母、尼になりて、同じ家の内なれど、方かたことに住みはなれてあり。父てはただ、われをおとなにし据すゑて、われは世にも出で交らはず、かげにかくれたらむやうにてゐたるを見るも、頼もしげなく心こぼそくおぼゆるに、きこしめすゆかりある所に、⁽²⁾「なにとなくつれづれに心こぼそくてあらむよりは」と召よすを、^(注2)古代の親は、宮仕人はいと憂きことなりと思ひて過こぐさするを、⁽³⁾「今の世の人は、さのみこそは出でたて。さてもおのづからよきためしもあり。さてもこころみよ」といふ人々ありて、しぶしぶに、出だしたてらる。

まづ一夜ひとよ参る。菊の濃くうすき八つばかりに、濃き搔か練ねを上うへに着たり。さこそ物語注3にのみ心を入れて、それを見るよりほかに、行き通とふ類るい、親族しんぞくなどだにことになく、古代の親おやものかげばかりにて、月をも花をも見るよりほかのことはなきならひに、立ち出づるほどの心地こころ、⁽⁵⁾あれかにもあらず、うつつともおぼえて、⁽⁷⁾暁あかつきにはまかでぬ。

里さとびたる心地には、なかなか、定さだまりたらむ里住さとぢみよりは、をかしきことをも見聞みきこきて、心もなぐさみやせむと思おもふをりありしを、^(a)いといはしたなく悲かなしかるべきことにこそあべかめれと思へど、⁽⁹⁾いかがせむ。

師走しはすになりて、また参る。局つぼしてこのたびは日ひごろさぶらふ。上うへには時々、夜々よとよも上のぼりて、知らぬ人の中にうち臥ふして、⁽⁸⁾まどろまれず、恥はづかしようものつつましままに、忍しのびてうち泣なかれつつ、^(c)暁あかつきには夜深よこく下くだりて、日ひぐらし、父の老いおとろへて、われをことしも頼たのもしからむかげのやうに、思おもひ頼たのみむかひゐるたるに、恋こしくおぼつかなくのみおぼゆ。⁽¹⁰⁾母亡ははなくなり注4にし姪めひどもも、生まれしよりひとつにて、夜は左右ひだりみぎに臥ふし起きするも、あはれに思おもひ出でられなどして、心もそらにながめ暮くらさる。立ち聞き、かいまむ人のけはひして、いとみじくものつつまし。

十日ばかりありて、まかでたれば、父母、炭すす櫃びつに火などおこして待ちゐたりけり。車より下りたるをうち見て、

「おはする時こそ人目も見え、さぶらひなどもありけれ、この日ごろは人声もせず、前に人影も見えず、いと心ぼそくわびしかりつる。かうてのみも、まろが身をは、いかがせむとかする」とうち泣くを見るもいと悲し。つとめても、「今日はかくておはすれば、内外人多く、こよなくにぎははしくもなりたるかな」とうちいひて向ひるたるも、いとあはれに、なにのほひのあるにかと涙ぐましよう聞こゆ。

(注) 1 きこしめすゆかりある所——祐子内親王家。 2 古代の——古風な。昔氣質の。

3 物語にのみ心を入れて——作者は少女時代から物語に読みふける生活を続けていた。

4 母——作者の姉のこと。二人の幼い娘を残し、すでに亡くなっている。

問

(A) ——線部(1)について。ここで表している意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 話相手 2 成人 3 愛娘 4 女主人 5 侍女

(B) ——線部(2)は、誰のどういう様子か。次のうちから最も適当なものを一つ選び、番号で答えよ。

- 1 両親の、対話がなく寂しそうな様子
2 父親の、働かず全てをあきらめた様子
3 作者の、退屈で目標を見失った様子
4 母親の、出家して孤独に暮らす様子
5 作者の、何もせず頼りなく暮らす様子

(C) ——線部(3)について。具体的にどうということか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 出仕をうながす

2 出仕をあきらめさせる

3 出仕するかどうか判断させる

4 出仕させないでおく

5 出仕を遅らせる

(D) 線部(4)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 試み 2 先例 3 結果 4 定め 5 生活

(E) 線部(5)の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 悲しみに沈んでいる

2 呆然ぼうぜんとしている

3 腹立たしく感じている

4 後悔している

5 投げやりになっている

(F) 線部(6)を漢字一字に改めよ。(ただし、楷書かいしよで記すこと)

(G) 線部(7)の現代語訳を、五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(H) 線部(8)から読み取れる作者の気持ちとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 女房として出仕することへの期待

2 家の中で暮らしていることへの不満

3 親もとから離れて出仕することへの躊躇ちゆうちよ

4 これまで通りに暮らしたいという願望

5 いやでも出仕するしかないという覚悟

(I) ～～～～線部(a)～(c)の助動詞の文法上の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- 1 推量
- 2 完了
- 3 自発
- 4 受身
- 5 可能
- 6 尊敬
- 7 過去

(J) ———線部(9)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 苦しい
- 2 悔やまれる
- 3 落ち着かない
- 4 思いがけない
- 5 浅はかだ

(K) 空欄 に入る言葉として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 やをら
- 2 さすがに
- 3 よも
- 4 こちら
- 5 つゆ

(L) ———線部(10)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 頼りない
- 2 気がかりだ
- 3 待ち遠しい
- 4 残念だ
- 5 申し訳ない

(M) ———線部(11)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 うんざりする
- 2 思いなおす

3 気を紛らわせる

4 もの思いをする

5 びくびくする

(N) 線部(12)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 人から大切にされ

2 人と対面もして

3 人の目を気にして

4 人並に暮らして

5 人の出入りもあり

(O) 線部(13)は何を指すか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 母親が出家していること

2 作者が家を離れていること

3 家が荒れ果てていること

4 父母が年老いていること

5 作者が帰宅していること

(P) 線部(14)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 はるかに

2 今さら

3 やはり

4 思いがけなく

5 次第に

(Q) 線部(15)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 生きがい

2 希望

3 取り柄

4 美しさ

5 愛想

【以下余白】

